

○議長（村松 積） 休憩を閉じ再開いたします。

---

◇ 金 田 憲 治 ◇

○議長（村松 積） 3番、金田憲治君、質問を許します。登壇願います。

3番、金田憲治君。

○3番（金田 憲治） 3番、金田憲治です。

通告に基づき、農業活性化施策と廃棄物処理建設の質問をし、村長の方針をお聞きしたいと思います。

1番目の農業活性化施策についてお聞きいたします。

村内を見ると昔は畑や田んぼだっただろうと思われる土地がススキで覆われている箇所が増えてきたように思います。なしやりんごなど、立派な果樹が根元から切られている姿も見られます。

下條村政要覧の資料によりますと、平成2年から平成17年の15年間で農家人口は46%減っていて、特に女性の方が減り方が大きくなっております。経営耕地面積は30%の減で、実に中学校のグラウンドの100個分に相当する面積ですし、加えて従事者の年齢層人口ですが、下伊那管内では60歳以上の従事者は平成2年では56.3%、15年後の17年には72.5%で高齢化が浮き彫りにされております。また、鳥獣による被害拡大により、耕作しない方がましであるという人たちもいるなど、農業を取り巻く環境は一層の厳しさを示しております。

一方、世界的な異常気象による食料生産の減や穀物輸出国が国内需要を優先するなどの影響による価格の高騰。さらにはTPP、いわゆる太平洋連携協定による物品関税の原則撤廃の交渉参加問題など、住民の食の安定供給や生活費のアップなど生活に影響が及んでいるところでございます。

このままの状況だと、農業従事者がさらに減り、荒れ地が増え、また生活も苦しくなると予想されます。活気を出すには何か新しいことを始める必要があると思います。

そこでお聞きをいたします。1点目として、農業委員会で活気が出る議論がなされているか。また、その内容はどうか。

2点目として、村民が安心安全で安定した価格の食糧を確保できるとともに、生産者に

においては付加価値をつけた農産物の安定供給とその農産物が販売できる環境が重要であろうというように思われます。そのため、退職者や農業への職種転換する者たちが組合を結成したり、気の合った者同士が共同で経営ができやすくするような受け皿づくりの支援をされたらどうか。また、販売促進の拡大を図るため、1つの方法として今手狭と思われまますまいもの館の販売面積を拡大されたらどうかということをお伺いいたします。

次に、廃棄物の処理施設設置や最終処分場の建設などの動きについてお伺いいたします。

睦沢地籍に産業廃棄物の管理型埋め立て最終処分場の建設を目的に、説明会を開催する旨の通知がなされました。地元の者からすれば、早くその概要を知りたいと思っているようでございます。

最近の事例では、阿智村での管理型最終処分場の建設が最終的に取りやめになった経過があります。誰もがごみを出し、どっかでその処分をしなければならないことは誰でも理解していますが、いざ処分地が身近に建設される段になりますと、安全性や環境などに影響がないだろうかと、そういうような観点から慎重にならざるを得ないのが一般的であります。

廃棄物の法律改正により、業者が従来より建設しやすい環境になったことから、参入してくる機会が多くなったのではないかと思います。そこで村が今現在相談を受けている物件とその内容がどのようなものかお伺いいたします。

また、建設される地域や建設されることによって影響がありそうな地域などに情報を周知するのは基本的には事業者でございますが、必ずしも適正に情報周知がなされないことも考えられます。村としても適正な時期に情報の周知が必要かと思いますが、どのようにかかわっていくのかお伺いいたしまして質問を終わります。

○議長（村松 積） 伊藤村長、答弁願います。

伊藤村長。

○村長（伊藤 喜平） 金田議員の質問にお答えいたします。

農政問題について質問がありました。今、日本で一番難しい問題は農政問題でございます。

今の危惧された面、これは下條村どこでなくて、日本中でも大変な問題でございます、なかなか手が付かないという問題でございますので、それを第一印象においていただきました

と思います。

それともう1つでございますけれども、今グローバルスタンダードの時代になったときに、日本の農業の生産基盤というのを考えてみると、これいろいろのデータの出し方があるんですけども、だいたい日本が1とするとオーストラリアは900倍から1,000倍の耕地をっておるそうでございます。これなかなかカウントの仕方が難しいんですけども、アメリカは450倍から600倍までの間の規模をっておるという、そういう人たちと日本の農業どうしてたち向かせるということが1つの問題でございます。

特にTPPの問題なんかあると、たちどころにやられてしまうという考えもありますけれども、昨日私NHKのテレビを見ておりました。皆さんも見たと思いますけれども、米農家、集約してそしてやっていくんだと。なんとしてもこれ味だとか安全性で勝てるだろう、いけるだろうというもう自信というかやる気に満ちた、確か新潟のシリーズもんでやっておりましたけれども、それだと思います。

それから昨日は、もう1つ重大な発表がありましたけれども、ストーブで有名なコロナという大きな会社がありますけれども、だいたいこれも生産ももう伸び悩みだろうということで、農業法人を作って農業をやっていくんだということでございます。国内消費はもちろん輸出に向けてやっていくんだという正式な発表がありました。既存の農家の皆さんで希望のある人は技術者として採用すると。そしてびきっとやってのけるということでございまして、株式会社であるコロナが、相当大きな会社でございますけれども、そこまで踏み切ったというような問題。

それからもう1つNHKで出ておったことは、中国との米の輸入輸出の協定はなんとしても広げたいということでやっておるそうでございます。中国もなかなかしたたかでございます、尖閣諸島の問題を見ておっても、また今日の日経新聞には東シナ海共同開発しますよといってガス田やっておるんですけども、もう既にガスを採取しておるようなお話もありました。なかなかしたたかでございますけれども、そういうお話も聞いておる中で、基本的には今日本をはじめ先進国のだいたいが人口減少社会でございます、特に日本はその最たるもんでございますけれども、発展途上国というのはもう人口も増える。それから食のレベルが上がってきて、今まで動物性蛋白質に変わるものとして穀物やいろいろを食べておったんですが、今度は本当の動物性タンパク質を取りたいというような食の

レベルが上がってくるということになると、これは地球的な規模で見ると食糧は不足するという正確な予想が出ておるわけでございます、そういう状況の中で日本の農業、そしてその中から下條の農業どう考えるかということでございます。

それでここでじゃあ下條は何もそのあまり努力しておらなかったのかというと先人、先輩、それから今日に至るまでそんじょそこら辺に負けない努力はしておるとしております。それなりの成果が上がっておるわけでございますけれども、今時代の変遷、今なしを切るとかりんごを切るとかというお話もありましたけれども、あの当時はなしが最大であろうということやって今こういう状態になる。りんごが最大であろうと思ったら世の中がこういうふうに変わってきたということございまして、これなしは駄目なら切るとは当たり前のこと。一回なしを植えたら未来永劫なしで食っていくとこういう時代でないことは確かでございます。これは嗜好、皆さんの人の嗜好が違って皮をむくようなものかないませんよという若者の思考もあるわけでございますし、農業の今まで本当に作ることだけ、自由経済社会の中で農産物、特に米なんていうのは統制経済で作ったらいくらでも売れる。そして価格はこういうふうに決まっておるのが農業の現状でございます。そのベースに農業協同組合というのがあったわけでございますけれども、作ることは命がけでやるんですけれども、売る段になるとまるで下手。そして流通機構というのはもうだんだん変わって、昔の野菜は八百屋さんで売るもんだ、それからそんなふうに決まっておりましたけれども、今は野菜を売るにしてもりんごを売るにしてもなしを売るにしてもほとんどがスーパーでございます。そうすると昔は産地化をしてブランドにして、それを市場に大量に出して、そこで市場の原理で任して売って売り抜けるということでございますけれども、これはもう過去の遺物に近いわけございまして、大手スーパーなんていうのは直接取引は平気でやります。

そうするともう選果場に出し、選果場の料金、流通経費。それから選果場も1つ作ったんだけれども、もう少し集約していかんとなかなかやっていけないということで、今上郷までわざわざ持って行ってそこで選果して、それできれいなパックしてそれで市場に出して、市場に出すと市場手数料、それから買ったたかれて、そして各地に散っていくわけでございますけれども、そこまでは美しいんですけれども、そんなことばっかやっておるとすごく流通経費がかかってしまうということで一生懸命やったんですけれども、手元に入

ってくるのはいくらもないということでございます。

そうすると今言ったように、後継者不足ということになりましたけれども、後継者を作るには後継者になるようなこの適正利潤がなければ駄目なんですけれども、適正利潤はみんな流通の方に取られて、これは仕方ない。農協も一生懸命やっておるんですけれども、流通の方に取られてしまって、手元に何にもない。おまえ後継者だ、何とかやれと。こういう方式でいくら唱えておってもこれはいけない。その根本を直さなければいけないということと同事に、今言ったように先人先輩たちは非常に下條村の農業ということについて、私たちが含めてでございますけれども、先進的な取り組みをしていただきました。

大正時代からも私もちょっと調べてみたんですけれども、大正時代、養蚕と米が主体でございました。養蚕と米。米はコンスタントに作れば売れるという時代。そして養蚕というのは短期間に現金収入が上がるということでございます、養蚕が非常に栄えた。しかも平地もないとこで、山畑でも何でも桑ができるということで、相当の収益を上げたそうでございます。当然経済でございますので、恐慌の時もあったわけでございますけれども、総じてその流れがきたわけでございます。

戦後のことは私もいくらかわかります。その戦後のあの動乱時代、日本ではまず食う物が無い。農家でも米が食えないという時代がありました。それほど米が不定しておった時代でございます、統制経済の中でやっておったわけでございますけれども、その中で輸出をするなんていうことは考えたことがなかったんですけれども、当時生糸というのが輸出産業、花形でございました。特に下條村では、天竜社というのがありまして、うら若き女工が300人以上おったと思いますけれども、全寮制ということでございます、大した盛況でございました。

製糸業というのは非常にまず熱源を使うわけございまして、本来ならば今の石炭だとか重油でございますけれども、当時はそんなものは貴重品でございまして、薪炭、薪でございまして、下條村の雑木林というのは非常に有効利用され、泰阜村も始めて天竜社で使うエネルギーになる薪炭が非常に盛んでございました。

当然全寮制ということになれば、そこで米も当然配給の中で使うわけございまして、野菜類も合原を中心に相当使われました。篤農家が今でもおりますし、あの野菜を作る良い条件の中で一生懸命頑張っているいい成績も上げられたと思います。

そしてそれだけの人間がおるということになると、外食もするし、それから医療あたりもいろいろ消費があるわけでございまして、私も合原の町並み、天竜社が終わって間もなく女工の皆さんがあつた辺をねやねやで歩いておつたということ覚えておりますし、私もたまたまうちの商売の関係で阿南自動車に行っておりました。その中で3割や4割は天竜社の仕事ということで、薪を運んだりいろいろして恩恵にあずかった覚えもあるわけでございすけれども、その生糸が60kの梱包して、それをこの辺からそれから鼎の天竜社からはじまって、飯田の日通へ持って行って日通から9時間もかけて横浜の埠頭へ生糸を持って貴重品でございますので、生糸を持っていき、それから船で輸出してアメリカへ行き、ほとんどがストッキングに使われたというようなことを聞いております。

その生糸が、昭和30年の後半ころにアメリカのデュポン社というのがある。大きな化学工場でございますけれども、化学会社でございます、これがナイロンを發明したということでございます。

生糸というのは非常に光沢もあるし、吸湿性もあつて非常にいい。今でも重用されておりますけれども、残念ながら寿命がないということでございます。これ裏返しにしてみると回転率がいいわけでございまして作つて破れる。糸が引くのは伝染病とかなるそうでございすけれども、やると回転は非常にいいわけで絶好の品物でございましたけれども、ナイロンになると吸湿性は悪いんですけれども、寿命はめっちゃめっちゃ長いということでございまして、それから急速に養蚕産業というのは衰退したわけでございます。

その時分からもう農村におつては食つていけないということでございまして、皆がバスに乗り遅れるなということでございまして下條村を離れていったわけでございます。本当に残つてほしい人から先に下條村離れて行って、ご承知のように3,859名まで落ち込んじゃつておる。平成3年の終わりころでございます。私就任したのは平成4年でございすけれども。そういう状態。

これは本当に集落の崩壊、消滅になるわけでございまして、どのくらい危機感を持ったかわからなかつたわけでございすけれども、その中でどうにか今日まで皆さんのご協力いただいてなつたわけでございすけれども、先人、先輩たちはもうその時にも一生懸命やつていただきました。

特に私は素晴らしいなというのは、まず第一に養蚕、桑を見切つたら今度は圃場整備を

いたしました。こんなその今までの牛馬を中心としたような圃場では駄目だということで、圃場整備を徹底してしました。それから圃場だけでは駄目だということで、果樹にも転換したわけでございまして、その当時の金で金額にするとなんと10億7,300万円。今の村の予算の半分を、これは4年か5年かかってやったわけでございますけれども、全村的な圃場整備。それにかけて今度は石仏団地、あれを山を削り谷を埋めて、そして下伊那でも大きな団地形成をしたわけでございます。

私もその時は議員でございましたけれども、これは大変なものでございまして、下の集落、私どもも含めてでございますけれども、こんなに山を削ってこんなことをしたら、あの山がどーんときたらみんなつぶれちゃうじゃないかというようなこと。これもデマでございまして、井戸端会議から始まったわけでございますけれども、私は井戸端会議というのは大事なことだと思います。そこに議員さんが加わってわっしょいわっしょい無責任な井戸端会議のテーマについて一緒にやるんでなくて、議員さんは議員さんの立場でもう少し上の段階で、「いやそうは言うけれども、村が相当やっておるんじゃないか」とか「こんな意見もあるぞ」ということをちょっとこの指導してやらないと、井戸端会議が風評の流布になり、そして無責任な方向に行ってしまうというのが今までの例でありますし、今までも多かったわけでございますけれども、その体験したのは私でございます。私の工場の水も実は水道ない時分でございますので、足畑のこっち側で取っておりました。そうしたらほとんどの人が取っておったんですけれども、その中に消毒薬がだだあ出てくるような話になってしまって大騒ぎしました。私も「そんなことはあり得ない」ということでやったんですけれども、どうも相当苦労した覚えがあります。

そうしてそれが苗を植え、最盛期にはすごい赤梨団地ということで、それこそ視察団も来ましていろいろやって赤梨では県下の生産量を瞬間的ではあると思いますけれども、誇れるようになり、それなりの成果は上げたわけでございますけれども、それがだんだん時代の変遷とともに嗜好も変わってくる。そうすればそれを転換しなければいけないということで、切ることもやぶさかでないと。切ってまたゼロから転換する。この転換するのがなかなか難しいわけでございますけれども、そういうことでその事象だけをとらえて「大変だ大変だ」ということは、これもちょっと慎んでいただいた方がいいのかなということでございます。

あの農業会議、私はいつもJAの会議にも出るんですけども、その時に矢沢組合長はいつも「農業の将来はこうだ」という。のは使ってはいけませんよと。はという、「農業も」もにしてくださいと。どんな業種だって今はどんなふうに変わっていくかわからんときに「農業は農業は」ということになると、「農業も」ならいいんですけども、いたずらにこの悲壮感を植え付けてしまっちは前向きな発想ができないからこうだこうだといって、今は必ず「農業も」と言ってください。「は」と言うと必ず言い直してくれますけれども、そのくらい変遷するわけでございます。

そこで今度は遊休荒廃地のお話も出ましたけれども、今下條村は遊休荒廃地というのは非常に少ないと思います。というのはそばを始めました。私は作る農業から売り切る農業にしようということでございまして、道の駅も作りました。道の駅、そばの城も作りました。それから今のうまいもの館も作ったわけでございます。それで地産地消。これは県の方針でもございまして、地産地消、給食から始めていくらか商社に売ったり、それから刈谷市へ売ったり、それから阿南町の組織と一緒に売ることに誠心誠意やりましょうということでございます。決して農業の農協の体質を批判したり背くんでなしに、どうもあの体系では手元に残る再生産意欲の上がる金はあまり入ってこないのかなという気がして、農協さんには農協さん徹底して応援しておりますけれども、そういう方向に舵を切ったわけでございます。

おかげに今、そばの城も今まで低空飛行を続けておりましたけれども、ちょっとここで将来に向けてなんとしてもこのリニアは遠い話でございましてけれども、三遠南信、これ全通するなんていったら、今が希望的な観測で青崩をトンネル開けるというんだけど、それは段取りはするかもしれんし、いくらか掘り出すかもしれんけれども、あれを全通するまで待っておったら、この辺でだいたいあんまり生きておる人がおらんくらいだと思って私は結構だと思ふ。それよりは部分開通、例えば引佐から鳳来まで今年中には供用開始。もう道はほとんどできておりますけれども、供用開始になるだろうと。そうしたら151使ってこうくる。そうすると天竜公園阿智線も今現実のものとしてやっております。今度来年は橋脚も建ち、上部構造もできればやるということになっております。

そうすると流れはこうきて睦沢の辺から親田へ上がってうぐすへって昼神行くという、このルートを既成の事実として作られては困るわけでございますし、今観光業者も大

変でございます。世界最大の何とかという観光業者も今日本へ進出を決めたということでございまして、アジア、特にアジアの中の日本、これに対して徹底的にネット販売でやるんだということで、これもニュースが出ておりました。

その中で、競争しながらこれ最短コース行かれてしまうと困るということでございまして、なんとしてもそばの城をより魅力のあるものにしましょうということでいろいろクロワッサンだとか、それからたい焼きだとか、いろんなことを今仕掛けております。これは将来に向けて投資でございまして、なんとしてもここへ来てこう行くと、それから天竜峡へ出てこういう行くというルートにしなければいけないということでやっております。

その附随として、今の一番成績を上げておるのがうまいもの館でございます。これも簡単にできたなと思っておっては違うわけございまして、最初にメンバーを決めて何とかやってやりましょうといったら、すぐ変わってしまうので、踏ん切るまでには3年間くらいかかったと思います。

そうしてやってやっと軌道に乗ってきたということでございまして、ただ作ってもうちよつとよけりゃいいじゃないかなんていう平面的な考えでなくて、そこには涙もあり笑いもあり、本当にあの従事しておる皆さんを含めて、会員の皆さんもやつとやる気になって今直販体制にできるようになったわけございまして、そういう苦勞を基本として提案をしていただくことは非常にいいことだと思いますけれども、表面だけ見て何とかしようということは、ちょっと私どもにとっては物足りないなど。

それでもしそれが私が言うことはオーバーだと思ったら創設者3代くらい変わっておりますので、もしあれだったらその皆さんにご紹介するので行って調べていただければ、どのくらい腰を切るまでに大変であったということがわかると思います。あれは行政と違って収益事業でございます。いつお客様がどんな形でくるかわからん。来ないかもしれない。出荷がほしいときに出ないかもしれないし、いらんものばっか出てしまうと、こういうミスマッチが非常にあるわけでございますので、その辺の難しさ。行政ならこれでちょっと方向違いました、こうだなんていうことになるんですけども、その辺の難しさというのもこの納税者にはあるわけでございます。その中で今脈々として努力しておっただいて今の成果が上がってくるわけでございます。

もう少し広くしましょうと、これはいいことだと思います。ところがいろいろやってみ

ました。広げてはやり広げてはやりということでございますけれども、私どもは最初あんなに売れるようになるとはゆめゆめ思っていなかったわけでございます。

そうするとあの建家で結構なんですけれども、レイアウトがまるで違っちゃって売るのは売方。そして加工は真ん真ん中に置いてしまったわけでございます。売り場を広げようと思ってもなかなか広がらないということで今道の駅の方へ今回館を出しました。この向こうは開いておるといふか、常時開いておるわけではなしに、そばの団体が入ってきたときはここに入って上でも足りんときはやっておりますけれども、これをもしやるということになれば敷地は決まっております。今私は県に頼んでおることは回廊でございますけれども、あの回廊を向かって阿南町側、「入り口から阿南町側取っ払っていいか」と言ったんだけど、「いやいやまだ残存価格もあるし、もうちょっと置いてくれ」ということで、今その話も進めております。

それよりも今度は本当に状況を見て、あの生産加工部を一部屋送って、そしてあの中に入れ込むか、それとも奥といっても決まっておりますので、1 m 5 0 から 2 m、奥へもう少し壁を取っ払ってやるかしかないわけでございますけれども、今いろいろの方策を考えておるところでございますけれども、これはうれしい誤算ということでございます。前向きに今回も 7 0 万円くらいかけてやるようになっておりますけれども、そういうことでまず一段やってみるということ。

それから今言ったように、二手も三手もやるということでございます。

農業は非常に難しいということと 동시에、みんなが難しいわけで、下條村だけでなしにみんなが難しいということ。それから下條村は、先人、先輩、そして皆様方が頑張っていただけで、南部の 7 カ町村の中で J A が扱う農産物というのは 7 0 % か 8 0 % 下條村が占めておるそうでございます。この事実というのは高く評価しなければいけないわけございまして、そんなことも心に置いていただきたいということと、基本的には食糧というのは不足する流れになるということ。

それで今度は、中国へも輸出する米の話聞いておりますと味だと。味で勝負するということによっております。私どもも米、私自身も米依存型でございますけれども、米のおいしいレストランでも結構でございます。米のおいしい食堂に入れば、少くとも魚なんかまずくても何とも不満が出ないということございまして、私は時々旅に行くと必ず米

を買ってきます。新潟上越の方へ行くと必ず買ってきますけれども、なかなかブランド米だなんて値段はいいけれども、その割には下條の米の方がこれいい勝負だなというときもあるわけでございまして、それだけ下條もレベルアップしてきたわけでございますので、いかにこれからも道の駅でもどこでもブランド品として売り出すように今策定しておるわけでございます。

今の話の中で、誤解しないようにしていただきたいのは、JAが駄目だと言っておるんでなしに、JAはJAの機能としてやっておるんですけれども、あまりにも巨大化して小回りが効かないようになってしまっておるということでございますし、人事異動もやたらやるわけでございますけれども、農協の実態見ておっても省力化して、そして徹底したスリム化をしていかないと、あの大きい団体の維持ができないということ。この決算を見てもそうでございますけれども、合理化した分だけがどうにか利益として上がっておるという、この厳しいことはよくわかるわけでございますので、それはそれとして理解して、それはそれとして協力して、その上にいい意味で競合、いい意味での競合してお互いに切磋琢磨するというのが生き残りの道であろうかと思っております。

それから最後に廃棄物の問題でございます。

今、議員おっしゃったように、今県としても割と許認可を下ろしやすくなりました。というのは、今までがめちゃくちゃのもうマイナス、ストップの方から入ってくるような論議でございまして、阿智村もそうでございます。長野県が県職員が一生懸命やって、あんな無駄なことしたなと思うんですけれども、もう阿智村の言うとおりになりまして、取付け道路存分に作って、先作らにゃ駄目だ、何だと全部社会資本整備しておいて、最後にあそこが残ったわけでございますけれども、いつも常駐7~8人しておったな。今度変わりましたのでとあいさつに行くんだけど、「おまえさんたち何しておるんだ」と言ったら「何というかどうしておって努力しておる」と「何を努力する」と言ったら「努力のしようがない」なんて「何にも努力しておらんじゃないか」と言うんですけれども、ああいうものを作ると必ず反対派のおるのがくるわけでございます。そうしてめちゃめちゃにやるわけでございまして、さんざんやってやって刀折れ、やっつきちゃって今徹底しちゃったわけでございます。

あれは時代も変わってきて、あまり廃棄物が今までのようには出ないだろうという田中

康夫様の方向転換もあって、いさぎのよい撤退をしたわけですが、あれはいつまでも引っ張っておらなくて良かったなということでございますけれども、それはそれとして、ああいうふうな風潮になってしまうともう生活していくための廃棄物の施設が全然できなくなります。それはプロフェッショナルがおって、全部ダックを組んでおってどうも八百長のような質問して、それに対して八百長な応援をしたりしておると全然できなくなってしまうという弊害もありまして、県でも考えて、理屈の通るものなら理屈が通る地元をクリアしたもんなら許可を出しましょうと。その変わり出した限りは規制は徹底してやるぞと、地元と含めてというこの簡単に言うとそういう形になりました。

例えば地元交渉も、今までは地元交渉をなさいと云ったときに焼却炉だと50mの煙突ならば半径最低限でも500mでございまして、その地域だけの同意を取ればいいと。それでその地域に例えば親田へ作るとしたら、その地域に山田河内がちょっと入っておったとしたらこれは山田河内も含むよと、こういう中でしっかり地元とお話しなさいということでございます。地元といい加減な話をしたなんていうことになるとうそれはもうすぐ駄目でございます、その点は的確にやります。そして地元で問題ないとなつて議事録でやってみて、さらにやってみて県が一応チェックします、地元。「確かにそのとおりだ」といったら今度は下條村へ来ます。下條村へ来て「これでどうだ」というんで、「いや、そうか地元もそこまでならこれ仕方ないな。そいじゃ県と私どもと一緒にやりましょう」ということでございまして、私も村長就任してからもう廃棄物係のようなもんでございまして、小松原でやって駄目。豚団地でやって駄目。桃立でやって駄目ということでございます。

特に親田の豚団地でございまして、このことについては私は農業振興、畜産が非常な勢いで伸びておる時でございました。その時に私はもう慚然としてJAを怒ってやっただけですけれども、JAは牛は連れてくる。そして飼わせる。肥料はいくらでも売る。「廃棄物をどうするんだ」といったら「まあまあ」って逃げてるだけで大変でございました。本当にやるんならその終末、循環できるようなシステムにしなければいけないということで、私は押し取り刀でなしに畜産振興のために出て行って、そして先頭を切ってやっただけです。これは途中から農協も「しまった」と思っただけで一生懸命やっただけですけれども、あの結果になってしまったわけでございます。

これはどうしても地元を受け入れなかった。50対51で賛成が51になったんですけども、またそれからやる。やっておるうちに業者がまいってしまったということで撤退した問題。それから小松原もしかり。小松原やったわけでございますけれども、私のところには正式に申し入れは当然あるわけです。それで正式には地元に行って話すわけでございますけれども、村が仲介の労をとれということでございますけれども、それは私どもやってみて失敗したという例が3つともそうでございます。行政が入るとそれ道を直せ、公民館を作り直せ、こうだこうだなんていうのはもうそれは仕方ないわけでございますけれども、いいほど言われてそこまで行政が頭を下げてこの忙しい中でやる方がいいことか悪いことかということで行政は一步引いております。

そして出てもし許可が出たということになれば、県と一緒にしっかり管理監督はしますと。これは地元も住民も含めて、地元の住民にもそこに加わっていただく。加わっていただくということは従業員で加わっていただくか、どういう形になるか。それが最低限条件ということと、もしそこでやるんだったらこの道は通ってくれては困るよというのを過去にいったことがあります。それ以上は聞き置くということでございまして、何でも行政が出て行って格好つけてやるという時代でなくて、そこは適当な距離を置かなければいけないということと、このごろなくなったんですけども、こういう情報が入ってくるとやたら土地がほしくなる業者がおるわけございまして、土地を買ったりいろいろすることがあるわけでございます。今既に下市田でも風評の息でございますけれども、なんか駅ができるんじゃないかということで買いあさっておるといふか、そんなことも聞くわけございまして、無責任な風評私は情報はやるべきではないということでノータッチでございます。

もう1つあったのは、気の合った同士で農業やる。これは当然でございまして、気の合った皆さんでなければできないということと、窓口はJAと農業改良普及センター、これできっちりとした組織もあるわけでございますし、農業委員会にもそれを通じてあるわけでございます。

農業委員会がどういう方向を出すかということでございますけれども、議員の言われたこと以上のものは出ていないというのが現状でございます。ぜひまた農業委員の皆さんにもこの問題を投げかけて、あの皆さんも「ああそうか」というこのいい意味での刺激だと

か、それから前向きに参加していただくという流れを作ることも、そうした仲のいいもの同士のやることであるわけでございますので、ぜひ土に親しむ。そして健康保持には一番私はいいと思いますので、ぜひその力をそんな方向に向けていただければ幸いと思っております。

以上で答弁終わります。

○議長（村松 積） 3番、金田憲治君、再質問ありましたら。

3番、金田憲治君。

○3番（金田 憲治） 農業問題に関しましても、今の廃棄物処理の関係に関しましても、細かく説明をしていただきました。

その中で決して本当に下條だけじゃなく、日本中の問題、ある程度世界的な問題で非常に難しいとは思いますが、販売路を拡大していく方向でいろいろ検討されていると、こんなようなことから総合的にそういうものを作って検討されていくんだらうというように思います。

これはこれまでとしまして、それからもう1つの廃棄物の方でございます。これに関しましては、今村長さん言われましたように、同意から説明の方に向かったという、非常に業者とすればある程度やりやすくなった。

それで当然村は、ある一定の情報がきちっとしたものでなければそれ情報は流せないというのは承知はしておりますけれども、ただ今この法律改正によってひとつの概要書それが出てきたときには合理的なものはあとは全部廃止すると。合理的でないもの、いわゆる単なる反対ですとかそういうのは当然排除するという、これ当然のことだと思うんですが、もうそうなる一定のルールに基づいて概要説明。それから計画の説明と、こういう段階になってくると思います。その前の段階で全然知らない、なかなか今回の場合も当地区域はあんまりだいたい外の方がそういう説明だとかそういうとこ配られておると。いわゆる説明の説明開催のお願いというものが流れていると、こういうことでございますので、その辺のバランスを見てひとつこういう情報はありますよという、そういうような情報を公平的に流してもらえればありがたいなど。ただ仲介をするとかそういうことではないんですよね。そんなことを思いますので、その辺。いわゆるその概要のその一定のルールにならない前の話として、住民があんまりしらなんだということではいけないので、その辺

のところをこういう話がありますとか、そういうことを説明されたらどうかなというように。仲介ではない。

○議長（村松 積） 伊藤村長。

○村長（伊藤 喜平） 言わんとすることはよくわかります。

それにしても、今こういう状態になっておるといふこと。それで私も過去にいろいろ苦労して辛酸をなめております。それとこれは日進月歩、特に焼却炉だとか、それからそれに基づく加熱、要するにその熱源を利用したの農業だとか、それから今度トンネルの埋め立てだとか、そういうことについて行政が知り尽くしておればいいんですけども、下手な説明をして逆に今度は開き直られたとき、駄目で開き直られたときに「行政は何をしてやったんだ」ということになる可能性も多いわけがございます。

それと何でも村が周知徹底せよということがございますけれども、だいたいその地域の人は知っておると思います。そうしたら自分の地域は自分で防衛しなければいけないといふことで、村が言うまではおらはなるで防衛力ゼロでいくんだぞといふこの風潮といふのはまずいのかなといふふうに感じております。これは当然その中で必ずその区からも村へ相談があると思います。そして始まり出すと業者も来ると思います。私はそれに対しては知っておる限りの努力はするし、それから今度は県とよく連絡して、県にはプロフェッショナルがおります。そこで大いに議論を交わす。

そいじゃ焼却炉だったら炉はどこだと。全部のメーカーを聞いたり性能をチェックしたりすることはできるわけがございますし、灰の問題、それから煤煙の問題。これも今までクリーンセンターがあるわけございまして、灰の問題についても1年に2回ずつ定点観測、地上でどのくらい灰が降ってきておるのか、これはほとんどわからんと思うんですけどもそれだとか、排出ガス。今トンネルから1年に2回ずつどのくらいのものがどのくらい出ておるかといふことは徹底してやっておる。一回の検査料が70万円位かかります。

そのこともそうしたことも、業者はもちろん知り尽くしておるわけでございますけれども、そんなチェックもしたりして、あとは私どもは県とよく協議をして、管理監督は徹底してしますよといふことを言うことが一番いいんだと思いますので、そんな方向でやっていくということと同事に、ここまで風評といふか実際まだ桃立あたりが投げかけたそうで、第一球を投げたそうでございますけれども、それはそこに住んでおる人はみんな知ってお

ると思います。こんなものがあるんだということは、それはわからなかったら不満だったら不安だった不満だったら業者にその場で大いに聞いていただくということしか仕方ないと思います。村がやれとかいった、よせとかいう、そんなことはできる時代じゃないわけでございますので、そういうご理解でおっていただきたいと思います。

○議長（村松 積） 3番、金田憲治君、いいですか。